## 257　急性心筋梗塞の冠血行再建効果判定におけるI-123 BMIPP SPECTの有用性

広瀬義晃, 石田良雄, 林田孝平, 下永田剛, 外山卓二
濱田星紀, 前野正和（国循センター放診部）
野々木　宏, 土師一夫（同　心内）
植原敏勇, 西村恒彦（阪大トレーサ）

I-123 BMIPPを用いて急性心筋梗塞の脂肪酸代謝をT1-201心筋灌流，局所壁運動所見と対比した．対象は急性心筋梗塞１３例である．BMIPPはT1より大きな欠損を示した．Bull's eye 表示を用いて欠損の拡がりを定量的に解析し，冠血行再建術後の欠損改善率を壁運動と比較したところBMIPPはT1に対し改善率が大であり，壁運動改善と一致した．T1/BMIPP欠損比は急性心筋梗塞における冠血行再建による効果を予想しうることが示唆された．

## 258　慢性リウマチ患者におけるdipyridamole負荷$^{201}$Ｔ１心筋シンチグラフィーの有用性

百瀬滋紀、富田　泰、水谷和正[z]、川添修身[z]
今西好正[z]、藤川光弘[z]
（聖マリアンナ医大東横病院　内科、同放射線科[z]）

心疾患の既往がなく、心電図上異常を認めない慢性リウマチ患者（ＲＡ）に dipyridamole負荷$^{201}$Ｔ１心筋シンチグラフィーを行い、プラナー法およびＳＰＥＣＴ法で解析し、ＲＡの活動性との関連を検討した。

ＲＡ49例中27例に心筋への集積低下を認め、集積低下を認めた群では有意に赤沈、リウマトイド因子(RF)、CRPが高値を示した。抗カルジオリピン抗体は検査した全例で陰性であった。ＲＡの活動低下時点で再検査し得た３例ではＴ１集積の正常化を認め、この集積低下は可逆性であることが示された。

## 259　ｼﾞﾋﾟﾘﾀﾞﾓｰﾙ負荷心筋PET—正常被験者における安静時心筋血流量と冠血流予備能の検討—

高橋　晶[1)]、飯田秀博[2)]、田村芳一[1)]、小野幸彦[1)]（秋田脳研内科[1)]、放射線科[2)]）

正常被験者11例（年齢35-48歳、心エコー、ﾄﾚｯﾄﾞﾐﾙ負荷心電図、血液検査で正常と判定。）に、安静時およびｼﾞﾋﾟﾘﾀﾞﾓｰﾙ(DIP)0.56mg/kg/4min静注投与5分後に酸素15標識水を静注し、ﾀﾞｲﾅﾐｯｸPETを施行。前壁、中隔、側壁に設定した関心領域での心筋血流量(MBF)と冠血流予備能(CFR)を定量的に測定した。

| | MBF (ml/min/g) | | CFR |
|---|---|---|---|
| | 安静時 | DIP | Dip/安静時 |
| 中隔 | 0.86±0.28 | 3.03±1.37 | 3.58±1.89 |
| 前壁 | 0.88±0.20 | 2.71±1.25 | 3.08±1.54 |
| 側壁 | 0.92±0.24 | 2.35±1.09 | 2.89±1.50 |
| 平均 | 0.89±0.24 | 2.70±1.25 | 3.18±1.64 |

MBF, CFRは各関心領域間で有意差を認めなかった。これらの値は、今後の臨床測定の基礎となるデータと考えられ報告する。

## 260　Dipyridamole負荷$^{201}$Tl心筋シンチグラフィにおけるHgb値のwashout rateに及ぼす影響

千田　豊[1]，伊藤綱朗[2]，高木　勲[2]，松村　要[3]（社保羽津病院　内[1]，同放[2]，三重大　放[3]）

Dipyridamole (D) 負荷$^{201}$Tl心筋SPECTにおいて求められたwashout rate (WR) が，各症例のHgb値によって影響を受けるか否かを検討した。正常者18例及び虚血性心疾患の既往のない各種心疾患43例に対し，D 0.56mg/kgを4分間で静注後，$^{201}$Tl 2mCiを静注し，$^{201}$Tl 静注5分後より負荷像を撮像し，さらに3時間後，再分布像を撮像した。WRについてはBull's-eye mapにより左室全域のWRを算出した。61例のWRとHgb値との間には，相関係数r=−0.80, 危険率1%以下で有意の負の相関が認められた。以上より，D負荷$^{201}$Tl心筋シンチグラフィにおけるWRはHgb値の影響を受け，WRの評価にはこの点を充分考慮すべきであると思われる。

## 261　syndrome Xにおけるジピリダモール負荷$^{201}$Tl心筋シンチグラフィ

岩井　務、成瀬　均、福武尚重、山本寿郎、森田雅人、有井　融、高橋敬子、大柳光正、岩崎忠昭
（兵庫医大　一内）、　福地　稔（同　核）

syndrome X 11 例に通常の自転車エルゴメータを用いた運動負荷と，ジピリダモール0.84mg/kg 投与（Picanoの方法）による負荷を行った。胸痛の有無，心電図変化，シンチ上の欠損につき，両負荷方法間で出現頻度を比較した。

両負荷方法間で胸痛の有無に差はなかったが，心電図変化，シンチの灌流欠損出現頻度はジピリダモール負荷で高かった($p<0.05$)。また灌流欠損は軽度のことが多く逆再分布が比較的多く認められた。

以上よりsyndrome Xにおけるジピリダモール負荷は運動負荷よりも心電図，灌流欠損出現頻度が高かった。

## 262　Dipyridamole負荷Tl-201心筋SPECTにおいて低レベル運動負荷併用法は有用か？

Dipyridamole単独負荷法との比較。

成瀬雅彦、三谷勇雄、義井　譲、持田泰行、岩沢祐二（済生会横浜市南部病院循内）、朝倉晃一（同放）

Dipyridamole負荷Tl-201心筋SPECTにおいて低レベル運動負荷併用により検査の感度やその有用性を向上させ得るか検討した。低レベル運動負荷併用24例では初期SPECT像において灌流異常が24例中14例(58.3%)であったのに対し、Dipyridamole単独負荷例では10例中4例(40%)であった。胸痛は負荷併用24例中5例(20.8%)に生じたのに対し、単独負荷10例中では1例(10%)であった。低レベル運動負荷併用によりDipyridamole負荷法のsensitivityを変化させる可能性を認めた。

Presented by Medical*Online